

言語体験としての旅

佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」

河野龍也

✉ kono-tatsuya@jissen.ac.jp

This thesis examines two of Sato Haruo's literary works. One is the travel book *Nampo Kiko* (The Journey to the Southern Lands), and the other is the romance *Jyokaisen Kidan* (The Mystery of the Fan of the "Old Women's Morals"). Both of them are based on the author's experiences while visiting Amoy (Fujian, China) and Taiwan in the summer of 1920. The chief characters of these writings, who cannot sufficiently understand the local languages, feel as if there are high invisible walls in front of them and that they cannot contact the local culture, tradition and history. However, such senses of isolation also give them opportunities to grow their imaginations regarding what resides on the other side of the walls. So far as they view themselves as strangers, they can set their imaginations free and can enjoy them. But once they find themselves as Japanese, they are forced to face political problems and are made to feel uncomfortable. These changes are often caused by the problems of languages. In these pieces, languages do not appear only as tools for communication. They are strongly related to the local culture, and they decide and limit their users' ways of thinking and recognition. This seems to be what Sato found on his first overseas travel.

Keywords Sato Haruo(佐藤春夫), cross-cultural understanding(異文化理解), colony (植民地), travel writing(紀行文), lingual border(言語の境界)

1 はじめに——佐藤春夫と台湾・福建の旅

詩人・小説家として知られる佐藤春夫は、1920年夏の約3か月半、植民統治下の台湾に滞在した。当時の春夫は数えの29歳。1918年、小説「田園の憂鬱」(『中外』1918.9)の成功でデビューして間もない新進作家であったが、妻の不義にまつわる心労と、夫に背かれながらその事実を知らない親友の妻・谷崎千代への同情や思慕が重なり、神経衰弱に陥っていた。郷里新宮で静養中の1920年6月、新宮中学の同級生で、打狗(現高雄)に齒科医院を新築した東熙市(ヒガシキイチ)と偶然再会し、誘われて台湾を訪れたのである。7月6日、基隆入港後、台北の総督府博物館で森丑之助(原住民族研究者)に会い、旅行計画の立案を依頼して、東家には翌朝到着。打狗を拠点に対岸の福建省(7月21日打狗発、8月4日廈門発)や、鳳山、台南などの周辺都市を見物。さらに9月16日、森丑之助作成の台湾縦断プランに基づいて打狗を発ち、嘉義・新港・集集・日月潭・埔里・霧社・能高越・台中・鹿港・胡蘆屯(豊原)・阿罩霧(霧峰)などを経て、10月2日までに台北に着いた¹。入山許可や行路安全のため、この縦断旅行には総督府から手厚い保護があたえられた。台北で森丑之助宅に滞在後、10月15日、基隆を出発。その後、小田原の谷崎潤一郎宅に直行し(10月21日着)、妻と離婚。また谷崎の合意で千代との結婚に向けた調整が始まるが、結局谷崎の翻意で破談となる「小田原事件」が展開された。

春夫にとって、台湾・福建の旅は二つの点で重要な意味を持つ。第一に、度重なる精神的な打撃で創作意欲が減退した当時、旅行の思い出を書くことで執筆活動を維持できた点。第二に、旅行の実体験を描くことで、怪奇や幻想を主体とする仮構小説から、「私小説」への作風転換が用意された点である。「事件」後、『殉情詩集』(1921.7、新潮社)収録の詩で千代への未練を吐露する一方、福建省の旅に取材した紀行文を『南方紀行』(1922.4、新潮社)として編んでいる。また台湾関連でも、「日月潭に遊ぶの記」(『改造』1921.7)、「蝗の大旅行」(『童話』1921.9)、「鷹爪花」(『中央公論』1923.8)、「魔鳥」(『中央公論』1923.10)、「旅びと」(『新潮』1924.6)、「霧社」(『改造』1925.3)、「女誠扇綺譚」(『女性』1925.5)、「奇談」(『女性』1928.1)、「殖民地の旅」(『中央公論』1932.9-10)など10篇近くの作品を書き、『女誠扇綺譚』(1926.2、第一書房)を単行本化したほか、代表的なものを作品集『霧社』(1936.7、昭森社)に収録した。これらは長らくロマン主義作家のエキゾチシズムの一面として理解されてきたが²、90年代以降、台湾学の発展の中でその社会的な批評性が再評価され³、近年日本文学研究の分野でも注目を集めている。

1 春夫の作品から台北到着の正確な日付は判定できない。縦断旅行で優遇措置をとった総務長官下村宏の1920年10月2日付日記に、訪問者として春夫・丑之助兩名の名が記録されている(河野龍也編『佐藤春夫読本』東京：勉誠出版、2015、p.115に図版を掲出)。下村長官は後年、春夫の偶然の来訪を台湾宣伝の好機と捉えていたことを明かしているが(『女誠扇綺譚を読み』『東京朝日新聞』1926.4.3.朝刊)、春夫の作品には、総督府の指令ひとつで自分を過剰接待する台湾官民の事大主義を皮肉る眼差しがある(「旅びと」「殖民地の旅」など)。

2 松風子(島田謹二)「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』——「華麗島文学志」——」(『台湾時報』231、1939.9)。

3 藤井省三「殖民地台湾へのまなざし——佐藤春夫『女誠扇綺譚』をめぐる——」(『日本文学』42(1)、1993.1)

本稿では、福建・台湾への旅行を春夫がどのように作品として定着させたかを考える。対象は、『南方紀行』と「女誠扇綺譚」である。そして特に、作中での使用言語が分かる場面に着目し、異文化表象や体験記述の様相を分析してみたい。というのも、春夫は旅行中、コミュニケーションの困難を感じる場面に遭遇するたびに、異文化理解の可能性や、植民地の社会構造を、「言語」という切り口から考えていった形跡があるからである。

2 「日本人」であることへの不安——「厦門の印象」(『南方紀行』)

「言語」への注視は、同時期の他の作家によるアジア紀行には見られない、春夫の特色とさえ言える。大正中期、長距離鉄道網の整備によって中国大陸の周遊観光が関心を集め、徳富蘇峰(1917)、谷崎潤一郎(1918)、芥川龍之介(1921)などの文筆家が競って視察旅行に出かけた。しかし、彼らの旅は、現地在住の日本人が主導し、安全な租界に宿泊して名所を巡る文字通りの観光旅行であったため、その旅行記には言葉で不自由をした経験がほとんど登場せず、もちろん現地社会の内側に入り込んだ形跡も見られない。それに対して春夫は、厦門出身の鄭享綬⁴と福建省へ、左営出身の陳聰楷⁵と鳳山・台南へ、鹿港出身の許媽葵⁶と台中近郊へ、という具合に、すべて地元の案内者に従う旅であった点が特筆される。彼らの導きにより、春夫は通常の日本人が立ち入らない空間へと連れて行かれた。旅行という限定があるにせよ、そこに描かれた体験は極めて稀少かつ濃密な異文化体験となり得ているのである。

さて、『南方紀行』は打狗から台湾海峡を越え、福建省の厦門・漳州に旅した約2週間の体験を描く紀行文である。前年の1919年、ヴェルサイユ会議で日本の山東権益が追認されたことに端を発する五四運動は中国全土に波及したが、福建省では同年末に起きた福州事件⁵への抗議活動がこれに重なり、また日本の権益に守られて急激に台頭した台湾商人への警戒心も相まって、厦門は華南でもとりわけ排日気運の盛んな土地として知られていた⁶。『南方紀行』の第一章「厦門の印象」には、何も知らずに排日旅館に宿泊するという恐怖の体験が描かれている。宿泊二日目の晩、宿のボーイが寝台に仕掛けていた豚の骨に気づき、そこに排日の意図を読み取ったとき、〈私〉は愕然として周囲を顧み、

が、従来の「異国情趣の文学」論の系譜を批判し、研究史に一石を投じた。

4 作中の「鄭」姓の人物が「鄭享綬」であることの考証は、拙稿「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代(3)——東熙市と鄭享綬」(『実践国文学』84, 2013.10)を参照されたい。

5 1919年12月、福建省福州で、日本人と台湾人が排日活動中の中国人学生に暴行を加える「福州事件」が発生した。これはさらに、拘束者の釈放を求めて日本政府が軍艦で威嚇、北洋政府が撤退要求を出す政府間の国際問題へと発展して行った。この事件を背景に、1920年の福建省では、日本の内地人および台湾籍民に対する抗議活動が盛んだった。

6 森丑之助も春夫に1920年7月20日付の書簡で、「同地方排日気分有之御途中御用心のほど願上ます」と注意を与えていた(新宮市立佐藤春夫記念館編『佐藤春夫宛森丑之助書簡』新宮：新宮市立佐藤春夫記念館、2003)。

安全な租界ではない地元の繁華街に寝ている自分の身の危険に初めて思い至る。

どうしたわけか丸つこい古い骨のかけらが一節そこから出て来た。この思ひがけないものはよく見ると豚の脊骨らしい。これはどうもポオイか何かの悪戯に相違ない。料理場の近くで犬がしやぶりさらしてあつた奴を、私が日本人と見てとつてこんな怪しからんことをしたものだに見える。私はその忌々しいものを足で牀の下に蹴り飛した。さてもう一度電燈を消して、この地方での日本人の不評判を思つて見る——つい昨日散歩の路上であの町はずれの壁に見出した落書のことを考へる。「青島問題普天共憤」「勿忘国恥」といふのがあつた。——日貨排斥のものとしては「勿用仇貨」「禁用劣貨」などともあつた。「こ奴は日本人だ!」といふやうなことを言ひながら私につつかかつて来た酔漢もあつた……。

注目したいのは、自分が嫌われ者の「日本人」であることを自覚したこの時、前日に見た町の光景が次々に呼び起こされている点である。五四運動にまつわる政治的スローガンや日貨排斥の標語、また酔漢の悪態など、厦門の街は、最初から排日の記号で溢れかえていた。しかし豚の骨の一件まで、不思議にも〈私〉は、それらが自分の身を直接脅かす記号だということに気づかなかつたのである。〈見えているのに、見ていない〉この不可解な事態は、一体いかなる条件の下で引き起こされたものだったのか。

そもそも同行者の鄭は、台湾在住だが厦門の出身で、日本語が話せず、〈私〉の案内や通訳はすべて筆談と英語で担っていた。互いに母国語でない言葉を操る不便さにおいて、二人の立場は対等だったのである。しかし、厦門に着き、船を降りたとたん、状況は一変する。鄭は〈私〉を放置して旧友や新たな知人と積極的に関わっていく。「厦門の言葉」が形作る一つの〈場〉に、〈私〉だけが参加できないという疎外感、同行者の台南商人である陳と2人の客、そして鄭と〈私〉の5人の宴会が始まった2日目の晩に決定的となる。「言葉が解らないことが主な原因だらうが、私はどうもひとりでのけ者にされてうれしくは無い」(下線河野、以下同)と、〈私〉の不満は明確な形を取るのである。

この一文を皮切りに、「厦門の印象」では、言語の不通に起因する疎外感が頻繁に言明されるようになる。皆で芸者屋に出かけても、言葉の通じない〈私〉は「気むづかしい顔」で「異邦人という気持ちを沁み沁みと嘯みしめて味ひながら」、同行者の酔態を傍観するしかない。また彼らの方も、「異邦人なる私にはもう一向話しかけようとはしないで、彼等の言葉——私には決して解らない言葉で話し合つてゐる」。そして鄭は仲間に「私には解らない言葉の二三句で何かを言つて」約束を交わすと、部屋に〈私〉を送り届け、厦門の路地の闇の奥へと消えてしまうのである。一人取り残された〈私〉は、「言葉の解らない人間たちのなかで眠らねばならない不安に怯え、その結果、ようやく「日本人に対する反感の激しい今日このごろのこの町」に一人でいることの危険に思い至る。そして「言葉の不通から双方で意志を判断し合ふ方法の全然ないことのはずみから」自分が殺される場面を妄想したとき、背中に刺さる敵意の刃先のような豚の骨を意識するのであ

る。

英語による対等な意思の疎通が断たれた時、〈私〉の前には言葉の壁が立ち上がる。そこから生まれる疎外感や孤独は、やがて〈私〉に「日本人」としての自覚をもたらしていく。「言語」が自己認識において果たす役割の大きさは、『南方紀行』が繰り返し説く所である。だが、〈私〉が「日本人」というナショナル・アイデンティティをネガティブな形で引き受けるプロセスは、一筋縄ではない。というのも、同作の中には、自己を「異邦人」と規定する別の段階が同時に存在しているからである。この二つの言葉には意図的な使い分けがあり、〈私〉の自己認識は、両者の間を微妙に揺れ動いている。「日本人」であることと「異邦人」であることとの間にはいかなる違いが見出せるだろうか。

3 「異邦人」の陶醉——「鷺江の月明」(『南方紀行』)

1920年代の廈門の都市情報によれば、鄭と〈私〉とが宿泊した南華旅社は、イギリス租界から南に逸れた古い路頭(船着場)を取り巻く下町(水仙宮街)に実在していたことが分かっている⁷。ここは水に因む五神(大禹、伍子胥、屈原、王勃、李白)を祀った水仙宮の門前にあたり、ジャンク船時代、日本・台湾から南洋に及ぶ幅広い交易港として発展してきた港町・廈門の記憶を濃厚に漂わせた空間であった。また、隣接する寮仔後街は航路安全を司る媽祖宮(潮源宮)を中心に栄え、門前町の常として大きな花街を形成していた。「廈門の印象」で〈私〉が連れられて行く「芸者屋」も、地理関係からこの場所にあったと考えてよい。しかし、廈門の芸者に対する〈私〉の第一印象は、「少しも美しくはないし、その歌は私にはいいも悪いも全く風馬牛だつた」と、落胆を誘うものだった。

ところが、『南方紀行』第4章の「鷺江の月明」で、〈私〉は再び寮仔後街の「妓館」(ここでは「芸者屋」に同じ)を訪れている⁸。その際の〈私〉の感想は、同じ紀行文とは考えられないほど、印象が百八十度旋回している。この日、近郊の集美で学校参観をした〈私〉は、帰りの舟の上で鷺江(廈門港)の夕景に深い感慨を催し、この良夜を花街で楽しもうと鄭に持ち掛ける。大いに賛同した鄭は、資産家の林正熊を誘い出そうと提案し、共に寮仔後に出かけて行った。林正熊の父、林季商(祖密)は台湾の霧峰林家の正嫡、日本の支配を嫌って中華民国に復籍した武将であるが、その子は柔和な貴公子であった。〈私〉は彼と美妓・小富貴との並んだ姿を眺め、「私に恋物語を書かせればこの二人を書く」と二人の美貌を賛美し、特に後者については、「彼の女は私がいままで見た女性、それには私の故国のもも加へたなかでも、やはり「真美」と呼ぶべきであつた」と絶賛に近い感想

7 南華旅社を含む、1920年当時の廈門に関する考証は、拙稿「佐藤春夫『南方紀行』の路地裏世界——廈門租界と煙草商戦の「愛国」」(『アジア遊学』167, 2013.8)を参照されたい。

8 「廈門の印象」の花街が無名であったのに対し、「鷺江の月明」では町名が明記されている。前者が路地伝い、後者が対岸から船でという訪れ方に違いがあり、地理的に両者は同一の町であるが、そのことに春夫が気づかなかった可能性がある。

を抱くのである。さらにそこで聞いた音楽も、「今まで音楽によつて一度も真に愉快を感じたと思へない私から、私の心を説き難い昂揚の状態に導いたことは我ながら訝しい事であつた」と書いている。言語の不通は前回と少しも変わらないのに、「言葉がわかれば何れはこの女たちも日本の芸者と同様に卑俗なことを無意味に喋り立ててゐるに違ひないのだが、何もわからない私にはその朗かな異境の言葉はただ啼鳥の声か何かのやうに聞かれるのが有難い」と言い、そして「悄然としてゐる異邦人を、妓女たちが時々思ひ出してはまだ満ちてゐる杯を手つきによつて無理に飲ませて、その上に新らしく麦酒を注いでしまふと再び暫は顧みなくなるのを感謝しながら」月を仰ぎ、アイヘンドルフの「郷愁」の一節を「私の国の言葉で」幾度も低く呟いて陶醉に浸つたと言うのである。

「鷺江の月明」の中の〈私〉は、「廈門の印象」と同じように、言葉の上で宴席から締め出されながら、その孤独を「異邦人」のみに許された旅愁の特権と考える余裕を持っている。逆に言えば、廈門の旅を楽しもうとするなら、〈私〉は「日本人」であつてはいけないのだ。こうしたアイデンティティの使い分けに関して、『南方紀行』の記述は実に周到である。「鷺江の月明」で〈私〉が口ずさむ歌の言語は、「日本語」ならぬ「私の国の言葉」として直接性が回避されており、しかもその歌はドイツ語からの訳詩なのである。

この訳詩に限らず、「鷺江の月明」の章は、実に多種多様な海外芸術のイメージで彩られている点にも特色がある。「タゴオルの筆」が描き出した磯の白鷺を横目に、暮れゆく鷺江の夕景は「アルベエル・サマンの詩」も「アンリ・ド・レニエの物語」も遠く及ばぬ美しさであつた。廈門の街の灯は「タアナアの構図」、そして我々が乗る舟は「ホキスラアが描き出した舟」、この景色の中で「異邦人」の〈私〉は、まだ見ぬ美妓・小富貴の噂に心躍らせている。

「鷺江の月明」の章は、「廈門の印象」で自分を一度「日本人」にしてしまった〈私〉が一つまり、自分を中国における排斥の対象者として具体的にイメージしてしまった〈私〉が、芸術的意匠の力を借りて再び自分をコスモポリタンな「異邦人」へと押し戻し、失われた「旅愁」のロマネスクな世界を回復してみせようとした物語と読むことが可能なのである。その際、「言葉の不通」はかえって想像を楽しむためのポジティブな条件に転換されているのである。

そして実のところ、「廈門の言葉」の共同体に拒絶される体験を描いた「廈門の印象」でさえ、「言葉の不通」は恐怖の引き金となるばかりではなかつたことにも注意しておきたい。「私には解らない言葉の二三句で」符牒を交わし、秘密の場所に遊びに行った鄭と陳。鄭は帰還するが、陳は路地の奥で出会つた私娼への愛に溺れながら、阿片の煙の中で眠り続けているのだと言う。そんな陳の行方を〈私〉がいつまでも気にし続けるのは、彼を捉えた廈門の街の破滅的な魅力に、〈私〉もまた強く惹きつけられていることの証左である。そして〈私〉がそれほどまでに想像力を刺激された原因の一つは、明らかに、言葉の壁によつて〈私〉がそこから拒まれたことへの未練なのである。

共通の「言語」によつて通じ合う者どうしが一つの同じ世界に住んでいるというこ

と。そしてその世界に参加できない者は、究極の孤独を嘗めなければならないのと同時に、「言語」の壁の向こう側へと不断に想像力を掻き立てられるのだということ。『南方紀行』が示すこのような春夫の知見は、親しみを感じる相手なのに語り合うことのできなかった朱雨亭を回想する最終章「朱雨亭の事、その他」の中に、明瞭な形で要約されることになる。——「言葉が通じ合はないといふことはやがて、私達が相異つた二つの世界に住んでゐて、しかも互に通ふべき道もないといふことに外ならない」。

4 「女誠扇綺譚」が描く「越境」体験

それでは、「言語」によって分断された世界を、人はどう「越境」するのだろうか。この問題に触れているのが、「台湾もの」の名作、「女誠扇綺譚」である。

この作品は、台湾南部の港町・安平から台南の西郊まで引き込まれた古い運河地帯の廃屋を舞台にしている。内地人の新聞記者である〈私〉は、台湾漢詩人の世外民⁹に連れられて、土砂の堆積により廃港寸前となった安平港で「荒廃の美」に打たれ、次いで運河の最奥部にある禿頭港^{クツタウカン}の歴史散策をする。残された大きな廃墟に入っていくと、二階から泉州語の女の呼び声がするので不思議に思っていると、近所の住民からここは幽霊屋敷なのだと警告される。徳に欠けた祖先を持つこの家の一族は、一夜の嵐で没落し、その結果、婚約を破棄されて狂死した娘の魂魄が、今も若い男を招くのだと言う。怪談を真に受けて恐れる世外民を嗤いながら、廃屋で拾った「女誠扇」から空想を広げた〈私〉は、一人の若い娘が、古い女徳を説く扇を手に、恋人と快樂を貪る様を思い描いている。ところが後日、廃屋の寝台で男の縊死体が見つかる。平気で恋人を捨て、周囲を欺く女の行為を憎んだ〈私〉は、彼女を追及しに出かける。が、探し当てた現実の少女は、恋人の死を深く嘆いていた。後日、〈私〉は新聞社で、女が米問屋の「下婢」であり、内地人(日本人)との結婚を主人から強要されて死んだことを聞く。

さて、この物語で探偵役を果たす〈私〉と世外民とは、文化的な背景も個人的な関心も異なる存在として描かれている。帰属集団から言えば、〈私〉は支配者側の植民者であり、世外民は被支配者側の人間である。そのような政治的な立場を互いに超えたところに二人の友情は結ばれているのだが、彼らが帰属集団の価値観から全く自由かと言うと、そのようなことはない。世外民が土地の歴史にこだわり、過去に対する詠嘆を事々に口にするのは、代々秀才(科挙の受験資格者である「生員」)を輩出した知的エリートの家柄を慕うルサンチマンに関わり、また、「声の女」の道徳破壊に喝采を送る〈私〉は、台湾に文化や歴史から自由な南国の「新天地」を幻想する点で、近代植民地主義の開発思想を担ってしまっているのである。当局から「統治上有害」と警戒されるような世外民の詩

⁹ 世外民のモデルは、春夫を台南に伴った陳聰楷(「鷹爪花」に登場する「陳」と)、反骨的な漢詩人であった許媽葵(「殖民地の旅」の通訳「A君」)の両者を複合したものだと考えられる。

を、「反骨の気概」というレベルでしか理解できない所には、〈私〉の盲点が端的に示されている。友情関係を強調する〈私〉の語りとは裏腹に、二人の懸隔は小さくない。

だが、そんな〈私〉にも、文化理解の姿勢が全くない訳ではないことが、例えば「荒廃の美」を強調する冒頭部に表れている。

人はよく荒廃の美を説く。又その概念だけなら私にもある。しかし私はまだそれを痛切に実感したことはなかつた。安平へ行つてみて私はやつとそれが判りかかつたやうな気がした。そこにはさまで古くないとは言へ、さまざまの歴史がある。この島の主要な歴史と言へば、蘭人の壮図、鄭成功の雄志、新しくはまた劉永福の野望の末路も皆この一港市に關聯してゐると言つても差支へないのだが、私はここでそれを説かうとも思はないし、また好古家で且詩人たる世外民なら知らないこと、私には出来さうもない。私が安平で荒廃の美に打たれたといふのは、又必ずしもその史的知識の爲めではないのである。だから誰でもいい、何も知らずにでもいい。ただ一度そこへ足を踏み込んでみさへすれば、そのの衰頹した市街は直ぐに目に映る。さうして若し心ある人ならば、そのなかから凄然たる美を感じさうなものだと思ふのである。

「史的知識」より感受性を重んじるとは言え、「荒廃の美」はそもそも、過去への想像力を抜きにして成り立つ美学ではない。そして〈私〉自身の態度は、幽霊の存在をめぐって世外民と口論になる次の場面に示されるように、「荒廃の美」に強く魅了されながらも、同時にその魅力に抵抗せずにはいられないアンビヴァレントなものであった。

「…亡びたもののなかにむかしの霊が生き残つてゐるといふ美観は、——これや支那の伝統的なものだが、僕に言はせると、……君、憤つてはいかんよ——どうも亡国の趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるものか。無ければこそ亡びたといふのぢやないか」

「君！」世外民は大きな声を出した「亡びたものと、荒廃とは違ふだらう。——亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廃とは無くならうとしつつある者のなかに、まだ生きた精神が残つてゐるといふことぢやないか」

「なるほど、これは君のいふとほりであつた。しかしともかくも荒廃は本当に生きてゐることとは違ふね。だらう？ 荒廃の解釈はまあ僕が間違つたとしてもいいが、そこにはいつまでもその霊が横溢しはしないのだ。むしろ、一つのもので廃れようとしてゐるその影からは、もつと力のある滌刺とした生きたものがその腐朽を利用して生れるのだよ。ね、君！ くち木にだつてさまざまな草が簇るではないか。我々は荒廃の美に囚はれて歎くよりも、そこから新しく誕生するものを讚美しようぢやないか…」

「亡国の趣味」の他にも、「若い身空で(略)過去を述べ立てて咏嘆めいた口をきく」「マンネリズムとセンチメンタリズム」など、世外民の感性を時代遅れなものとして扱き下

ろす態度が〈私〉には目立つ。だが、〈私〉にとって「荒廃の美」の静謐な魅力には抗いがたいものがあり、それを喜ぶ世外民的な感性を否定することでしか生への志向を回復できないのだとすれば、それは〈私〉の危機的な自己認識の表現でもあったのである。

実際、禿頭港で廃屋を見つけた二人が交わす対話と、それに続く〈私〉の感想とは、一見相反するように見える二人の感受性が、一つに重なる劇的な瞬間を捉えたものであり、作中でも特に異彩を放つ場面になっている。そして注目すべきは、ここでも「言語」が、文化的空間それ自体とほぼ同義の重い意味を担って登場することなのである。

「このうちは、君、ここが正面、——玄関だらうかね」

「さうだらうよ」

「濠の方に向いて？」

「濠？ ——この港へ面してね」

世外民の「港」といふ一言が自分をハツと思はせた。さうして私は口のなかでクツタウカン禿頭港と呼んでみた。私は禿頭港(クツタウカン)を見に来てゐながら、ここが港であつたことは、いつの間にやらつひ忘却してゐたのである。…世外民は、殊に私とは異つてゐる。彼はこの港と興亡を共にした種族でこの土地にとつては私のやうなストレンヂヤア無関心者ではなく、またそんな理窟よりも彼は今のさつき古図を披いてしみじみ見入つてゐるうちに、このあたりの往時の有様を脳裡に描いてゐたのであらう。「港」の一語は私に対して一種霊感的なものであつた。今まで死んでゐたこの廃屋がやつと霊を得たのを私は感じた。泥水の濠ではないのだ。この廃渠こそむかし、朝夕の満潮があつた石段をひたひたと浸したツアベラフ走馬楼はきららかに波の光る港に面して展かれてあつた。さうして海を玄関にしてこの家は在つたのか。

台南在住の〈私〉は、台湾で通用される「廈門の言葉」(閩南語)を一通り理解してはいたのだという。しかし母語でないだけに、そのニュアンスを十分身に着け、それによって外界を把握するまでの高度な言語感覚を持っているわけではなかつた。また、台湾の歴史にあえて背を向けようとする志向から、歴史ある廃屋を見ても、「家の大きさと古さと美しさとだけを見て」、その意味に気づくことができなかつたのである。そのやうな〈私〉が、世外民の何気ない「港」の一語によって開眼するのがこの場面である。つまり、カンというごく一片の「廈門の言葉」を通路として、今までは入り込もうとすらしなかつた世外民の側の世界に立ち、彼の目を自分の目として、風景の背後に潜んでいたその土地の文化的な意味を隈なく看取することができた。「女誠扇綺譚」の場合、「言語」は単なる意思疎通の道具というだけではなく、それを使う人間の、物の見方や発想そのものを根本から規定するものとして捉えられている。

5 コード化されない声

「女誠扇綺譚」が描く結末の悲劇も、恐らくこの「言語」の問題と無関係ではない。「下婢」が自殺するまでの経緯についてはすでに論じたことがあるが¹⁰、いまそれを簡潔に繰り返せばこうなる。男が一人で死んだことは、「下婢」が別れを告げた結果である。しかし、それが決して「下婢」の軽はずみな心変わりからでないことは、その後の彼女の嘆き方を見れば分かる。彼女が恋人に別れを告げ、しかも死体の発見を主家の「お嬢様」の預言によるものと偽装する必要があったことには、やむにやまれぬ事情がなくてはならない。

当時の台湾の「下婢」(査媒嫻^{ツァーボーカン})は、家具同然の財産と見なされ、主人の裁量により売買の対象となり、彼女たちへの虐待もしばしば社会問題となっていた。日本統治下でこの慣習は表向き禁じられたが、名を結婚に借りた売買は1920年代においても存続しており、この「下婢」も恐らくは、得意先である内地人の歓心を買うため、主人から縁談を強要されたのだろう。特に孤児であった彼女は、主人に恩義もあつたはずである。恋人の死を「お嬢様」の預言で当てたと偽装したのも、縁談に傷をつけないためであった。が、そこへ折悪しく、新聞記者の〈私〉が尋問にやってきたのである。記事になれば破談は確実で、恋人の後を追うしかない「下婢」が思い詰めたのも不思議ではない。つまり、「下婢」を死に追いやった原因は、間接的ながら〈私〉にある。作品終盤で、〈私〉の語りか途端に歯切れが悪くなるのも、今の〈私〉が自分の罪に気づいた結果であろう。

さて、今回、改めて見直したいのは、このような「下婢」の心情を、当時、一体誰が正確に理解することができたのかという問題である。〈私〉は「声の女」に道德破壊と生命主義のヒロインの役割を期待していた。しかし、情熱を傾けたはずの恋人を簡単に捨て去る女だと彼女を誤解した〈私〉は、腹を立てて彼女を追い詰めてしまった。会見の場面で自分の誤りに気づくものの、「何でもみんな申します」と言った「下婢」の言葉を〈私〉は遮り、幻滅から目を背けるかのように理解の通路を閉ざしてしまう。

一方、「下婢」により添い、彼女の苦衷を救おうとした「お嬢様」はどうか。「私は新聞などへは書きも何もしやしないのです」という〈私〉の言葉を善意の同情と解し、「有難うございます。有難うございます」と流暢な日本語で感謝を述べながら、彼女は涙を流している。しかし、結局「下婢」が死んでしまったことからすれば、秘密の恋が「下婢」にもたらした陶醉や罪悪感、またその過去が露顕した場合に起こり得る虐待への恐怖などの諸々に、「お嬢様」の理解も十分届いてはいなかったのではないか。

さらにまた、彼女の死を報じる新聞記者の同僚は、「台湾人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦点を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてみた」という。縁談自体が「内地人とつきあふことが好き」な主人の商略がらみで仕組まれたことは事実だろう。だが、「下婢」が死んだのは、意に反して結婚させられる相手が

10 拙稿「佐藤春夫『女誠扇綺譚』論——或る「下婢」の死まで」(『日本近代文学』75, 2006.11)を参照されたい。

内地人だったからではない。仮に相手が台湾人なら、結果は違っていただろうか¹¹。これらいずれの場合を考えても、彼女は孤独であり、その死の意味を正当に理解できた他人は見当たらないのである。

このことは、「下婢」の母語である泉州語が、本作の中では「××××、××××！」という伏字になって、全くコード化されていないことと奇妙に対応している。そもそも、「どうしたの？ なぜもつと早くいらつしやらない。」と翻訳されるこの科白は、没落した家の中で婚約を破棄された花嫁が、狂気に陥り、誰からも理解されぬままに、繰り返し呼びかけ続けたことばであった。「下婢」の死の真相がテキストの表層に明示されないのと同様に、「彼女たち」が属する言語空間もまた覆い隠されており、存在の気配が伏字という「脱落」の記号を通じてわずかに示唆されるに過ぎないのである。

『女誠扇綺譚』には、日本語、廈門の言葉、泉州の言葉という三つの言語が登場する。そして、それらが互いに異質な閉じた言語空間を形成している状況を描き出している。「言語」がいかにそれを使う者の感性を縛り付けるのか、そして、その垣根が取り払われる「越境」の瞬間がいかに貴重なものであるか。『南方紀行』と同様に、本作でも「言語」と「言語」の境界は、遮蔽幕のような不透明性として実体化されている。そして向こうの世界を見極めようとする想像力が、物語の原動力となっている。

旅行者としての春夫の意識もまた、この点に深く関わっていたのではないだろうか。春夫の3ヵ月半に及ぶ異文化体験の実質は、言語と文化、言語と感性の強い結びつきを初めて実感的に捉えた点にこそ存在していたと考えられるのである。

6 むすびに

1920年の旅行体験が、春夫のその後の活動に与えた影響は慎重に検討する必要がある。とりわけ、日中戦争期の中国観が、国策的な観点を超え得ず、むしろ軍国主義に歩調を合わせるようになった事実との関係は重要な課題であろう。だが、刻々の状況に関わる政治的な発言を、具体的な文脈の検証なしに総括することの軽率さを自戒して、今無理に結論を求めることはしない。ただ、職業作家としての出発期に行われたこの旅の言語化と、芸術的態度の根幹部分の明確化とを、春夫は密接な相互関係のもとに深化させていった経緯があること、そして、共同体への帰属意識がそこに大きな問題としてか

11 1920年当時、内地人と台湾漢族(本島人)との結婚ははまだ法律的根拠を持たぬ「雑婚」の状態、同年8月23日、台湾総督府が、内地延長主義の一環として、台湾においてのみ通用する「内台共婚便宜法」をようやく施行した段階であった。内地同様の正式な「法律婚」は、1933年3月1日施行の「内台共婚法」を待たねばならなかったことを考えると、作中で「結婚」と書かれる「下婢」の縁談を現実の台湾社会で考えた場合、これは内縁関係で、むしろ継続的な金銭の授受を伴う妾契約であった可能性も高い。この点、台湾漢族どうしの「結婚」ないし「査媒嫖購買結婚」との差異はあるが、そのことへの反発自体が「下婢」の自殺の直接原因とは、やはり考えにくい。「内台共婚」については、黄嘉琪「日本統治時代における「内台共婚」の構造と展開」(『比較家族史研究』27, 2013.3)に詳しく、これを参考にした。

らんでくることは確かである。

例えば、「女誠扇綺譚」を発表した1925年、春夫は萩原朔太郎との応酬の中で、自己の詩人としての資質を散文家とは全く異なるものとして、次のように説明している。

僕は純粋な日本語の美に打たれることが折々ある。言葉とはつまり霊のことだ。さうして近代人ではなく世界人でもない自分の魂を凝視して溺愛することがある。僕は折ふしのさういふ時間にだけ歌ふ。(略)昨日の思ひ出に僕は詩人であり、今日の生活によつて僕は散文を書く。詩人は僕の一部分である。散文家は僕の全部である。

(「僕の詩に就て」『日本詩人』1925.8)

「日本語の美」に打たれる瞬間、自分は「近代人ではなく世界人でもない」存在として歌うのだというこの主張では、言葉を「霊」=精神^{ガイスト}として捉える発想が際立っている。言葉とは、過去の時代から営々と蓄積されてきた文化的な記憶そのものであり、これを母語とする者の感性は、奥深い所で、それが保持する超時代的な記憶に結びつけられているのだと言う。言語共同体の一員として、この文化的記憶に形を与えるのが詩人の役割であり、逆に散文家であるためには、「近代人」「世界人」たることを志して、この感性の蠱惑に抗わなくてはならない。春夫の主張をこのように整理してみると、そこには、「女誠扇綺譚」に登場する審美的な新聞記者の〈私〉が、詩人・世外民の感性や「荒廃の美」に対して抱いていたアンビヴァレントな感情と、かなり共通する構造を見出すことができるだろう。

創作家としての春夫の特色は、詩人と小説家の二つの顔を持ち、両者を自己の矛盾として捉えていた点にある。しかも、彼が言う「詩」や「散文」は、実体としての芸術形式ではなく、「詩精神」「散文精神」(「散文精神の発生」『新潮』1924.11)というこれも精神^{ガイスト}を指す概念であったことが、その後の春夫の軌跡を意味づけて行く鍵となるように思われる。文化的共同体に直接アクセスする「詩人」というチャンネルを持っていた春夫は、日本の「近代」に対する懐疑が政治的な意味を帯びて大衆化する1930年代後半以降、「詩精神」の根拠を「国民感情の代弁」(「無暦日日記抄」『新潮』1946.1)に見出していった節があるからである。

このように、春夫の『南方紀行』および「台湾もの」の諸作に示された高度な春夫の批評性の消長は、彼に特有のジャンル意識と、大正作家が共通して向き合わねばならなかった文学の大衆化という状況の両面から辿っていく必要があるように思われるのである。

付記 本稿における佐藤春夫作品の引用は、『定本佐藤春夫全集』(東京：臨川書店、1998~2001)収録本文に拠った。

参考文献

- 藤井省三(1993)「植民地台湾へのまなざし——佐藤春夫「女誠扇綺譚」をめぐって——」『日本文学』第42巻第1号, pp.19-31. Fujii, Shozo(1993). Shokuminchi Taiwan eno Manazashi : Sato Haruo 'Jyokaisen Kidan' o Megutte. *Nihonbungaku vol.42 no.1*, 19-31.
- 黄嘉琪(2013)「日本統治時代における「内台共婚」の構造と展開」『比較家族史研究』第27号, pp.128-155. Huang, Jiaqi(2013). Nihontouchijidainikeru 'Naitai-Kyōkon' no Kōzō to Tenkai. *Hikaku-Kazokushi-Kenkyu vol.27*, 128-155.
- 河野龍也(2006)「佐藤春夫「女誠扇綺譚」論——或る「下婢」の死まで」『日本近代文学』第75集, pp.103-118. Kōno, Tatsuya(2006). Sato Haruo 'JyokaisenKidān' Ron : Aru 'Kahi' no Shi made. *Nihonkindaibungaku vol.75*, 103-118.
- 河野龍也(2013)「佐藤春夫『南方紀行』の路地裏世界——廈門租界と煙草商戦の「愛国」」『アジア遊学』第167号, pp.150-160. Kōno, Tatsuya(2013). Sato Haruo "Nampō Kikō" no Rojijura Sekai : Amoy Sokai to Tabako Shosen no 'Aikoku'. *Asia Yūgaku vol.167*, 150-160.
- 河野龍也(2013)「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代(3)——東熙市と鄭享綏」『実践国文学』第84号, pp.50-67. Kōno, Tatsuya(2013). Sato Haruo "Nampō Kikō" no Chūgoku Kindai (3) : Higashi Kiichi to Zheng Xiang Shou. *Jissen Kokubungaku vol.84*, 50-67.
- 河野龍也編(2015)『佐藤春夫読本』, 東京: 勉誠出版. Kōno, Tatsuya, ed.(2015). *Sato Haruo Tokuhon*. Tokyo : Benseishuppan.
- 島田謹二(1939)「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』——「華麗島文学志」——」『台湾時報』第231号, pp.50-81. Shimada, Kinji(1939). Sato Haruoshi no "JyokaisenKidān" : 'Kareitō Bungakushi'. *Taiwanjinhō vol.231*, 50-81.
- 下村宏「女誠扇綺譚を読みて」『東京朝日新聞』, 1926.4.3. Shimomura, Hiroshi. JyokaisenKidān o Yomite. *Tōkyō Asahi Shimbun*, 1926.4.3.
- 新宮市立佐藤春夫記念館編(2003)『佐藤春夫宛森丑之助書簡』, 新宮: 佐藤春夫記念館. Shingū Shiritsu Sato Haruo Kinenkan, ed.(2003). *Sato Haruocate Mori Ushinosuke Shokan*. Shingū : Shingū Shiritsu Sato Haruo Kinenkan.

河野龍也 Tatsuya KONO

(日本)実践女子大学准教授。日本近代文学、東アジア紀行文の研究。『佐藤春夫読本』編著(東京: 勉誠出版, 2015)、「佐藤春夫『南方紀行』の路地裏世界——廈門租界と煙草商戦の「愛国」」(『アジア遊学』第167号, 東京: 勉誠出版, 2013)、「佐藤春夫「女誠扇綺譚」論——或る(下婢)の死まで」(『日本近代文学』第75集, 東京: 日本近代文学会, 2006)など。